論説

豊後の「国府」再考

―方位論―

富来　隆

渡辺澄夫教授の大分大学定年退官を記念して、「豊後・国府の位置について」の一文を捧げたのは、一九七六年のことである（本誌八十四号）。はやいもので、七年がすぎた。本稿は、それを訂正するものではなく、むしろ補強する意味となろう。ただ、前とはちがって本稿では、もっぱら「方位」の問題に観点をすえ、あわせて国分寺の問題も同時に解しようと思った。御諒承を得たい。

――一九八三・九――

◇　◇　◇　◇　◇

一

律令制の整備とともに、地方には国府と国分寺（僧・尼二寺）がワンセットとして建設されたということは、すでに周知のところである。首都における宮殿と寺院（東大寺）のセットの、地方版として理解される。

聖武天皇の天平十二年（七四〇）、各国に七重塔一基を建て、法華経十部を写せ、との詔が下され、さらに翌十三年には、国分二寺に対する細目が官符によって示された―寺地は、国分寺が方二町、国分尼寺が方一・五町が、その基準とされている―。

国分寺における七重塔は、その高さ五十ないし六十mに及ぶものとされる。その壮大さは、まさに天にとどくかと世人を驚倒させたに違いない。

首都の地方版とはいえ、いな、地方のことであるからなおのこと、その天にそびえる高層ぶりは、その壮麗さと共に、当時の世人をして国王の偉大さを仰ぎ見させ、したがって地方国守の権威もまた、これを通して感得せしめたものと言えよう。

そういう意味からも、「なぜ、豊後の国分寺は、国府から遠いところ（約六粁）に建てられたのか」の疑問が出されてきた。そのために、国府の位置を疑う論さえ出たことがあった。私もまた、このような疑問（遠さをどう考えるか）を抱いていた。本稿は、まずこのことに答える努力から始まった、と受けとって頂きたい。

しかし本論の内容は、どこ迄も、当時の国府がいまの大字名「古国府」のうちにあり、とした先稿と異なるものではない。読んで下されば分かるように、むしろそれを補強する結果となった。地図をながめ、一万分の一地図ではなお足りず、市役所から二千五百分の一地図を数枚もらいうけ、さらに現地に出かけて当時の風景を想いながら、考えをすすめたものである。

まず当時の交通のことから始める。

豊前から豊後に入り、そして別府からいよいよ大分に、豊後の国府への道を歩む。陸の道は、いまの別府～大分の海岸道路ではなく、高崎山の西南―銭瓶峠（ぜにがめ）―を越える山道であった。このことが見落されてはならない、まず第一のポイントである。

『日向道』（歴史の道調査報告書、県教委）によると、臼杵藩の「道中記」（天保八年）として次のように記してある。

「由原（ゆすはら）下浜（はま）ノ市（いち）より別府江浜辺通り近道あり、駕は参り候得共、折々難所あり馬は参らず、本道高崎越行き、壹里近き由」（81頁）。

大分県史編纂室で収録した「公文録」および「大分県史料」によってみると、さらに次のようなことが見える。

「生石（いくし）村より浜脇（はまわき）村迄の往還は、去丁卯年中（慶応三年、一八六七）府内藩において官費をもって、岩石を貫鑿し海汀を築補して新道を開いた。ところが明治六年の暴風雨、逆浪によって総破潰、殆んど道の全形を失った。」そこで府内町（大分）の有志相はかって、緊急に修復の計画を立てた。基金を集め、出役を決め、「総額八千四百円のうち、足らざる分としての三千四百円を政府から借用かた願出、これを八ケ年賦返済として有料（道路・橋）、通行料を取立てること」で、特別許可され

ている。

これ以後、別府〜大分間の海岸道路が本道として定着するに至ったのである。

古代にあっては勿論のこと、明治の初めまで、高崎山（銭瓶峠）越えが、「本道」として利用されてきたのである。右のことを念頭におかねばならない。

国府および国分寺を論ずるについて、まずこのこと、すなわち銭瓶峠をこえて下ってくることを前提にして、問題を考えなければならない。

◇　◇　◇　◇　◇

いま銭瓶峠に立つと、緑のなかに真白い医大の建物が、すぐそこのように見下される。それから遠くないところに国分寺跡がある。とすれば、おそらく古代にあって峠に立った者は、すぐそこに見える感じで、五六十mの高さに燦然と輝く七重塔、ひいては国分寺の所在を見て、驚歎の声をあげたことだろう。そういう思いが、強く私をうった。「ああ、だから此所に国分寺を建てたのだ」と。

一つの疑問はとけた。だが、まだこれだけでは理由が薄弱である。なお他に、此所をえらんだ理由があろう。此所でなければならなかった、という理由があるにちがいない。

そのまま時日がすぎていった。この八月、ふたたび銭瓶峠をこえて大分に下った。帰ってから地図をひろげてみた。

一つは、近代都市における「同心円理論」（1925, Burgess）を、ここに（ここの古代都市域に）応用してみたら、どんなことになるだろうかとの思いにかられたからである。現在の大分市域についての「同心円」図と比べてみたら、どういう異同が考えられるかと思ったからである。

もう一つは、銭瓶峠をこえたとき、国分寺跡の向うに霊山（りょうぜん）が見えたからである。はたして地図の上ではどんなになっているかを確めてみようと思った。

同心円を画くとなると、どこを中心点にすえるかが問題となる。私は先稿で、国府の地域をいまの大字古国府（ふるこう）のうち、「本町」・「町口」とある地区を東西にはしる古道＝それが五〇〇mほどのところで二カ所、いずれも南に曲折（一二〇度）して東西に走っている特色をもつ道路＝を北境にし、それから南のほうを考えた。ここの「町口」の南にも五町ほどのところに「町口」の地名がのこっている。これらのことから、一応、方五町域のこのところを当時の国府域と考えてみたのである。

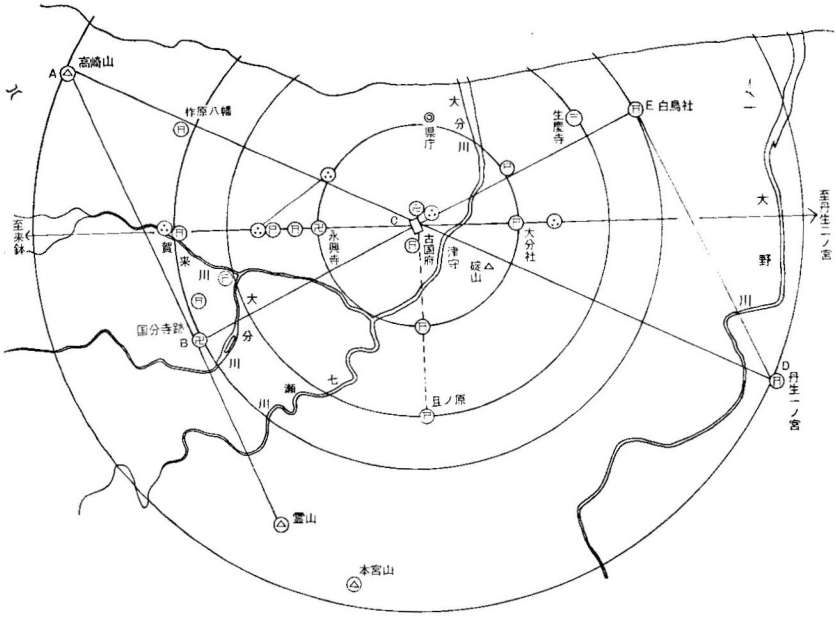
そして、「本町」の南にある「竜頭」が東西二町、南北は一町である。竜頭とは、国守をさしての謂となるから、この地名はすばらしい。その南に「田中」の地名がある。南東のほうは大きくけずりとられているが、いま南北に二町ほど、東西に一・五町ほどで、逆梯形のようになっているから、復原すれば、東西も二町で、当時は二町四方の大きな区域だったことになる。この東北にあたって「神水」の地名がある＝道路より東「田中」を復原すれば田中の内になり、その東北部に位することになる＝。この「神水」、神の水とは何なのか。おそらく此所に神社があり、地主神が祀られていたのではなかろうか。「田中」の地が、国衙のおかれた区域であった、と考えて良いだろう。

これが先稿を記したときの、私の思いであった。根本においては今も変らない。

そこで、どこに同心円の中心点をおくか、ということは、大体に決まってくる。「竜頭」の中央か、「田中」の中央か、その付近である。五万分の一地図でみると、ちようどこのところに古国府の国の字がある。五万分の一のことなので、いちおう「国」字を目安にして中心点とし、作図していくことにした。

そして、山のばあいは△印、寺は卍印、社は⛩印を目印にし＝さしあたりは、それらの境域（広さ）のことはひとまず措（お）いて＝作業をすすめていくことにする＝結果は、「竜頭」の中央を中心点とすることになった。

まずは、さきの本町・町口をほぼ東西に（じつは15°ほどずれている）はしる古道を西にたどっていくと、南大分駅のところまでは真直（まつすぐ）にはしっている。これから先はまつすぐでなくなる。そしてこのところに中津町とか墓田（つかた）の地名がのこり、北には永興寺（りようごうじ）がある。ここ迄を半径とすると、条里制のあともすっぽりとふくまれる。ひとまず、これを第一の半径とした。



つぎに高崎山（△印）までを半経とした。

その間にどういう半径をつくるかである。まず国分寺（卍印）までを半経としてみた。（北の柞原八幡宮もほぼ同距離のところになる。）

小円との間にもう一つぐらいほしい。そこで東の高城山生慶寺を目印にして（いま国鉄、高城駅の西南）円を画いてみた。南に旦ノ原（古代の軍団のあったところ）があり、そこ「神原」の卅印をすぎる。これはちようど良いことになった。

以上、四つの「同心円」図を作ってみた。国府の勢力の及ぶ距離的な比重が分るだろう。

つぎに、国分寺の位置を地図でたしかめてみることがある。銭瓶峠をこえたとき、ちようど国分寺跡の向うに霊山と本宮山が見えた。地図でみたらどうなっているのだろうか。面白いことに、高崎山と霊山と（△印を）結ぶと、ほとんどその線上に国分寺がくる。さきの、国府―国分寺の円とは接線のようになる。ということは、いったいどういうことなのか。

そこで、国分寺（卍印）と国府（古国府・竜頭の中央）

とをむすんでみる。また高崎山（△印）から国府までを結んでみる。そうすると、ほぼ直角三角形の形になる。

いま高崎山頂をかりにAとし、国分寺跡をBとし、国府・竜頭の（この同心円の）中心点をCとしてみる。そうすると、Bの角度が90°で、AC、BCがそれぞれ東南、東北に25°の線となる＝高崎山から国府域（南）の印鑰（いんにやく）社の線が30°となり、国分寺跡からは仏光寺、そして円寿（えんじゅじ）寺への線が30°となるが、これについては後に、国府のところでふれる＝。

25°の線、あるいは30°の線がひけるということは大変な発見であった。大和や畿内についての著書や論文ではお目にかかってきたけれども、自分で、しかも国府・国分寺のことで、この方位線と結縁しようとは思いがけなかった。偶然というにはあまりにも整いすぎている、と言わねばならぬ。おそらく、意識的に、このような「方位」を占める位置をえらんで、国府ならびに国分寺が、此の地につくられたのではなかろうか。これで国分寺の位置にたいする疑問がとけたように思えた。

しかし問題は、ここで終ってはいない。つぎの問題が始まった。同心円と、この三角形との関係である。国府の西側がこうなっているのならば、では東のほうはどうなっているだろうか。新たな疑問が、私に問いかけてきた。同心円であれば、中心から同距離のところに同じ大きさの勢力が及ぶと考えられるからである。

そこで、高崎山からのACの線を東南にのばしてみる。また、国分寺からのBCの線を東北にのばしてみる。これが東側の同心円の上で、果してどうあらわれるであろうか。古い社寺などがみられるであろうか。

それが現われたのである。高崎山（A）へと同距離、そしてACの延長線上に、宮河内・阿蘇入（にゅう）という地名があり、そこに丹生一ノ宮（元宮）が厳として存するのである＝入（にゅう）が丹生のことであり、そしてこの古社のウラに横穴古墳があり、かつての社を元宮とよんでいること等については、松田寿男教授の大著『丹生の研究』（早大出版、昭45）に詳しい調査・研究がある。

そして国分寺からのBCをのばした線上には、同距離（円上）に白鳥社がつくられている。これまた古社である。それだけではなく、国分寺の北にある七社明神も同じく白鳥社であることは、何かの縁由を思わしめる。

この丹生・一ノ宮をDとし、白鳥社をEとしてみると、Aに対するD、そしてBに対するEとなって、西のABCと東のC

DEとは、ほぼ対照的な直角三角形を形づくっていることになる。これは、たしかに意識的なものだろうと思われる。とすれば、いかなる意味をもつというのか。新しい課題が生まれた。

さて、国府を中心として東西にそれぞれ南と北とに25°ずつの線がひけたというからには、当然にその中央の東西線（0°）が考えられていなければならぬ。そして事実そのとおりなのである。

国府から東には、大分川をこえて大分社（大分大明神）が厳として存する。その東に、滝尾の百穴（横穴古墳）があり、その前面からかって銅戈が発見されていることなども著名のところ。そして大分社から東に東にと、大野川をこえて線をのばすと野間古墳群をもつ丹生台地（ここは昭37以来、前期旧石器の発見、発掘でも世に知られた）をすぎて、佐野の丹生神社（二ノ宮）にぶつかるのである。さきの阿蘇入（にゅう）の丹生・一ノ宮（D点）の存在と合わせて、まことに暗示的である。

つぎに国府から西のほうに線をのばしてみる。まず南大分駅ちかく、永興寺（りょうこうじ）（これが尼寺かとの説もある）があり、さらに西に御鷹ノ宮（百合若大臣の愛鷹を祀る）がつくられており、片面（かためん）の地に丑殿古墳、さらに西に千代丸古墳のちかくに諏訪（すわ）神社がある。

東西の線はにぎやかである—南北の線は、つぎの「国府」の地域のところで述べる—。

国府の東西に、同形に作られたほぼ直角三角形は、高崎山のほか神社・寺院など、さらには古墳とも関連するところがみられて、これらが決して単なる偶然事ではないだろうことを思い知らされる。

なお、初めに述べた、西側の高崎山と霊山とをむすぶ線（60°）は、これを北のほうに延ばしていくとそのまま宇佐の御許（おもと）山・雲ガ岳を指向している。この線が偶然のことではないとすれば、スケールはさらに大きくなる—私見はあるが、ここには省略し、他の機会を得たい—。

国府を中心とした「同心円」図について、もう少し述べておきたい。

国府から高崎山へのCA線上にちかく、そして国分寺までの半経とほぼ同距離に、柞原（ゆすはら）八幡宮が建てられることになる。そ

の柞原宮から南に、そして国府から西の線上に、諏訪社がつくられている。また柞原宮に関連して、大分川と賀来川との分岐点ちかく賀来社がつくられる。国分寺のほうからは、北に七社明神（白鳥社）が存すること、さきに述べた。これらの社・寺は、銭瓶峠をこえて大分平野に下ったときの要所としての地位をしめる。また古代にあつて神社の倉は武器庫であったとさえ言われるほどである。いろいろな点から、すこぶる重要な地域であると言えよう。

国府から南にあたっては、「旦ノ原」の地名がのこる。大分川と大野川との中間にあり、いまは大分大学・自衛隊弾薬庫などがある。旦ノ原とは、かつて豊後国の軍団（陸軍）の所在地だった呼称である—そこから東南に、大野川の白滝橋手前に「辰口」という地名がある。旦ノ原から正しく「辰」の方向に当っている—。

国府から東北には白鳥社があった。いま千歳・上であるが、もともとは「山津」の地域であると思われる＝『豊陽故事談』に豊後介となった大神惟繁が山津から府内に移ったなどの記事が見える＝。台地の東下は「乙津」と呼ばれる良港で、陸の山津、川海の乙津として、相ならんで水陸の要津として、物資の集積（集散）地として栄えたものと思われる。

この山津の一角、いま地蔵原では、遺跡の発掘が進行中であり、上代の倉庫群が発見され、郡衙跡かとして、その重要性が指摘されている。しばらく発掘の推移を見守りたい。

右のように、国府をとりまく周辺はそれぞれにみな重要な地域であったことが明らかである。「古国府」の地が、方位の観点からしても、かつて「国府」の所在地であったことを推察せしめるに足る、と言えよう。

ところで、五万分の一地図でみると、じつに簡単・明瞭であるかにみえる。しかし国府そのものは五町（ないし六町）四方の広さをもっている。国分寺も方二町である。他もまた、それぞれに広さをもっている。卍印、卐印だけでは不十分である。地図を一万分の一にし、さらに二千五百分の一として、それらを精密にしらべてみると、問題は少しく複雑になるが、しかしさらに明確にもなる。これらによって、以下「国府」域について見ていきたい。

◇　◇　◇　◇　◇

国府の境域のなかで、字名「竜頭」（東西二町、南北一町）と、「田中」（復原すれば東西二町、南北二町の二町四方となろう。現在は、東南側の半分がけずりとられ、小道が東北から西南にかけて走り、逆柄形の形に残っている）とが、その中心域と考えられる。

竜頭が国守をさす意味の語であることはすでに記した。おそらく田中の地（復原して方二町）が国衙のおかれた区域であっただろう。

分かりやすくするために、簡単に、この付近の略図を作ってみる。

国分寺跡の卍印から東北30°の線が古国府にたっすると、ちょうど本町・町口の中を東西にはしる古道（じつは15°ほど東北にずれている）に沿ってある二寺のうち、西側にある仏光寺に至る。さらに上野の台地にあがって円寿寺におよぶ。

この仏光寺から、東南に30°の線をひくと「竜頭」の真中をすぎ、「神水」をかすめる。つぎに（仏光寺の）東側の三福寺から、45°の線をひくと、西南45°にはこれも「竜頭」の中央に至って、さきの仏光寺から東南30°の線と交わる

（かりにa点とする―そして此所が、国分寺から東北25°の線のすぎるところでもあった―）。このa点から三福寺への45°線をさらに東北にのばすとこれも円寿寺をすぎるが、さらに延ばすと帆秋精神病院（もと万寿寺のあと）にたっするのである。「竜頭」の中央（a点、国司の館があったと推察される）は、このような地点である。

一方、さきごろ「大分ノ君」のものかと賑わした椎迫の古宮古墳（西北にあたる地）から、東南に大分川をわたったところの碇山（山頂に熊野社あり）を結ぶと30°の線となり、これが「田中」の中央北寄りの地点をすぎる。また此所から東北にある百合若大臣塚と、西南の豊饒（「宇佐大鏡」に「舟生」と見える地）の天満社をむすぶ線が45°の線となり、「田中」中央北寄りの地点で古宮古墳～碇山の線と交わるのである（ここをb点としておく）。なお、ここ（b点）から東北30°のところに、大分川をこえて霜凍神社がある（祖母山の神をまつる古社であり、下郡の地名もこれから起こった）。このことからもb点は大切である―百合若大臣については、先年、大分大学教育学部紀要に「小考」を記した（五の六号）。それが『国文学年次別論文集　近世』（一九八一）に転載されている―。岩屋寺石仏と、その東北の元町石仏とが、45°の線をなしている。これを西南にのばすと、「竜頭」「田中」の中央を南北にはしるラインと、「田中」の南寄りの地点で交わる。いま新公園の西にあたる（かりにc地点としておく）。いままで記してきたa・b・cの各地点が、「竜頭」「田中」（復原して方二町）の真中を南北にはしるライン上を、北から南にと連なるのである。

さて最後に、「田中」の中央、まん中の地点（かりにd点とする）は、b点とc点との中間になるが、ここから東北に45°の線をひくと、「神水」の地をすぎ、そして岩屋寺石仏の北の台上にのこる「惣社」の地名のところにたつする。これはまさしく45°の線にぴったりの地名の残存である。地名が歴史を語るすばらしさを、ここでも感ずる。

以上、ながながと、地図をたよりの想定をあまりに進めすぎたかも知れない。学問ではなくて、想像だと言われるかも知れないが、少くとも「方位」から考えをすすめるとき、25°ないし30°の線は、聖なるラインとよぶ人もあり、「天道信仰」は強烈なものがあった。45°は今日でも鬼門などと言われている。これらのことからして、この想定の意のあるところを諒承していた

だけるかと思う。

このように見てくると、「田中」の東北隅にあたる「神水」の地には、おそらくその当時、地主神が祀られていたことだろう。いま印鑰社に祀られている大国主命（したがって、いま大国主社ともよぶ）が、当時はこの「神水」の地に祀られていたのではないだろうか―大分川の洪水によって、古国府の東南がけずりとられたことによろう―。そう考えることによって、うまく解けるのである。「田中」（復原して方二町、国衙域と推定）の東北隅に大国主命をまつる社があり、これが「神水」の地名として現存し、さらに東北には「惣社」の地名があって、かつて此地に惣社の存在していたことを知ることができる―いま円寿寺を惣社山と号するのは、この地名に因んだものといわれる（「雉城雑誌」七）―。

いろいろみてきたが、南北の線がのこったままである。―竜頭」「田中」の中央を南北にはしるラインがあり、それから北には（上野の台地上に）金剛宝戒寺と弥栄神社がつくられている。南には大分川をこえた対岸に、「宮崎」の地に五柱社がある。さらに南には「旦ノ原」に神原の地名あり、⛩（速吸姫社）がある。国府域をめぐって、東西・南北、25°、30°の線、さらに東北45°の線などをひいてみると、パズルを解くようにうまく絵解きができる。

ところで「田中」内におけるb・c・dの中央ライン上の地点には、どのような官衙が建てられていたことであろうか。幸いにもたまたま近刊の『日本歴史』四二四号（昭58・9）にのせられた「肥前国府跡の調査」レポートに、国衙ならびに倉庫群が紹介された。そのなかにD地区として国衙跡の詳しい図が画かれている。南北（ここでは7°ほどずれている）に、前殿・正殿・後殿が記され、さらに南門、回廊その他も示されている。大いに参考となるものであり、豊後の「国府」もおそらくこれに近かったのではなかろうか。

以上で、私の言いたいことは略ぼ言い得たと思う。勢いこんで筆をとってみたが、想定はどこまでも想定であり、仮説はやはり仮説である。それだけに思わざるミスがあるやも知れぬ。大方の御示教を得たい。

（大分大学名誉教授・[redacted]）